



Title	日韓問題をめぐる語りを通して構築される在韓日本人女性のアイデンティティ：竹島/独島問題についての彼女たちの語りに関する新たな分析的視座
Author(s)	竹村, 博恵
Citation	大阪大学言語文化学. 2022, 31, p. 67-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/87495">https://doi.org/10.18910/87495</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日韓問題をめぐる語りを通して構築される 在韓日本人女性のアイデンティティ

—竹島 / 独島問題についての彼女たちの語りに関する新たな分析的視座—<sup>1</sup> \*

竹村 博恵\*\*

キーワード：在韓日本人女性、アイデンティティ、ポジショニング分析

本稿에서는 재한 일본인 중에서도 한국인 남성과 연애결혼을 하고 한국에 이주해 현지에서 자녀를 양육하고 있는 일본인 여성들을 연구 대상으로 선정해, 변동하는 한일 관계의 영향을 받으면서 생활하고 있는 그들이 어떤 입장에서 자신을 둘러싼 상황이나 인간관계를 인식하고 있는지를 밝히는 것을 목적으로 한다.

재한 일본인 여성에 관한 선행 연구에서는 그들만이 가지고 있는 특유한 문제로 한일간에 있는 정치 / 역사적 문제의 존재를 지적하고 있다. 특히 다케시마 / 독도의 영유권에 대해서는 그들이 일상적으로 질문을 받는 빈도가 높고, 그 질문을 받음으로써 그들 자신의 국가 정체성을 강하게 부정받는 듯한 스트레스를 경험하게 된다고 보고 되었다. 이러한 선행 연구에서는 개인의 인식을 도출하기 위해 그들의 이야기하는 내러티브와 발언의 내용에만 분석의 초점이 맞춰져 있으며, 인터뷰를 실시한 조사자 등의 외부 요인과 발언 내용과의 관련성은 고려되지 않고 있다.

본고에서는 인터뷰를, 조사자를 포함한 참여자가 상호적 관계를 맺는 장소로 파악하는 적극면담의 관점을 활용하였다. 또한 인터뷰 속에 나타난 발언과 내러티브는 참여자 간의 협동으로 구축된다는 시점을 통하여 인터뷰 중에 나타난 스몰 스토리 (small story) 를 포지셔닝 (Positioning) 분석을 이용하여 분석 / 고찰하였다. 그 결과, 재한 일본인 여성들은 독도의 영유권에 관한 질문에 적절하게 대응할 수 없는 원인을 자신이 가지고 있는 내부 요인에 기인한다고 생각하는 경향이 있다는 것이 밝혀졌다. 또한 내러티브를 통해 표출 / 구축된 그들의 정체성에서는 자신이 겪은 일로 인해 발생한 감정을 본인 스스로에게 귀결시켜, 자신 문제로 처리함으로써 상황에 대처하려고 하는 자세가 관찰되었다. 그들의

<sup>1</sup> 本稿で扱う竹島 / 独島問題とは、同一の島を日本では竹島と呼び、韓国では独島と称して双方が領有権を主張している事案である。分析するデータ内では語り手本人の使用した呼称に従い独島という表記を採用し、分析・考察においても複雑化することを避けるため独島の表記で統一している。

\* 한일 문제에 관한 내러티브를 통해 구축되는 재한 일본인 여성들의 정체성 - 다케시마 / 독도 문제에 대한 내러티브에서 나타나는 새로운 분석적 입장 - (타케무라 히로에 / TAKEMURA Hiroe)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

이러한 시점과 자세는 한국에서 장기간 동안 생활의 경험을 쌓아가는 과정에서 구축된 외국인의 하나의 입장 (자세와 시점) 이 표현되어 있음을 알 수 있다.

## 1はじめに

韓国法務部の発表によれば、2020年に韓国国内に在留している日本人の結婚移民者は15,480名であり、男性が1,631名、女性は13,849名と約9割が女性で構成されている。また在韓の日本人結婚移民女性は、中国人、ベトナム人について3番目に滞在人数が多い結婚移民女性集団となる<sup>2</sup>。現在日本国内では韓国の移民政策や多文化共生を目標とした取り組み、また韓国国内に在住する国際結婚家庭（韓国人と外国人配偶者とその子供たち）を対象とした多文化家族支援政策に関する調査を行った研究が多い（中尾2010）。その中で韓国に在住する日本人女性を対象にした研究としては1945年前後に韓国に渡韓し在住することになった日本人女性たちを対象にしたもの（山本1994）、宗教結婚を通じて渡韓した女性たちに関するもの（中西2006）、日韓国際結婚家庭の言語継承を扱ったもの（花井2016）などが存在する。本稿の目的は、韓国に住む多様な結婚移民の人々への理解の促進と生活環境の改善や支援への示唆へとつながる所見を発見することであり、類似した内容の先行研究としては日本国内よりも韓国国内において実施されているものが多い。例えば在韓日本人女性の養育上の葛藤について調査した박애스더(2017)は、近年増加傾向にある恋愛結婚型の日本人女性に対する研究の伸び悩みについて言及し、彼女たちを対象にした研究の必要性を指摘している。また、在韓日本人女性に関する先行研究では、彼女たちが直面する特徴的な問題として日韓の間に存在する政治的・歴史的問題の影響が指摘されている（야마모토2013, 나리타2020）。例えば彼女たちが遭遇する頻度の高い政治的・歴史的問題の影響の一つに、日常生活の中で韓国人から突然竹島/独島の領有権に関する質問を受けることが挙げられ、そのような質問を受けることは在韓歴の長さに関係なく彼女たちにとって自身のナショナル・アイデンティティを強く否定されるストレス経験であるとされてきた（나리타2020）。また야마모토(2013)は、韓国と日本のどちらを支持するのかを決定させるような性質を持つ質問は、相手に試されているのではと受けた側を感じさせることで精神的ストレスになるとも指摘している。야마모토(2013)や나리타(2020)の調査はそれらの質問を受けることを彼女たちがどのような経験として認識しているのかを明らかにしたという点において大変示唆的であるが、分析においては彼女たち個人の認識を表すものとして彼女

<sup>2</sup> 韓国法務部(2020) 国籍(地域)別在留外国人現況 <[https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M\\_01\\_01&vwcd=MT\\_ZTITLE&parmTabId=M\\_01\\_01&outLink=Y&parentId=A.1;A\\_9.2;#content-group](https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01&outLink=Y&parentId=A.1;A_9.2;#content-group)> (最終閲覧2021年3月20日)

たちの語りや発言の内容のみが切り取られて提示されており、発言の前にどのようなやり取りが参与者との間で行われていたのかなどといった発言が生じる際に影響を与えると考えられる外的要因への言及がなかった。インタビューとは参加した参与者が共同で利用する情報収集の場であり、その中で構築される意味は調査者と回答者によって協働構築されたものである（ホルスタイン&グブリアム 2004）。それゆえその場でなされる発言や語りは、それが個人の口から語られたものであっても必ず同じ場を共有する相手との関わり合いの中で発せられたものであり（Bamberg & Georgakopoulou 2008）、分析に際してはそのような発言や語りがなされた過程にも注目する必要がある。これらの点を考慮すれば、上述した先行研究で描き出された在韓日本人女性たちの発言やアイデンティティ像は結果のみが示されたものであり、それが提示されるに至ったプロセスが記されていないため再考の余地があると言える。

このような状況に鑑み、本稿では韓国人男性と恋愛結婚をして韓国に移住し、現地で日韓ダブルの子供を養育している日本人女性たちを研究対象とし、先行研究ではストレス要因として位置付けられていた竹島/独島問題に関する質問が自身の無知と向き合う契機になった語りとその質問に対し驚きつつも面白いと感じた語りという二つの語りを題材として取り上げる。そして、1) 彼女たちがそれらを語る際に語られる世界と語りの世界においてどのように自らを位置付けているのか、2) それらを語ることを通して表出・構築される彼女たちのアイデンティティとはどのようなものか、3) 上述した2つのリサーチ・クエスチョンを明らかにすることを通して見えてくる、日常生活に介入してくる政治的問題に対する彼女たちの関わりかたとはどのようなものか、という3つのリサーチ・クエスチョンを設定する。本稿では、ストレス要因として先行研究の中で位置付けられていた質問に遭遇しつつもそれを異なった視点から描き出している人々の語りに目を向け、それらを新たな分析的視座から考察することを通して日韓問題の影響と共存しながら日韓の狭間で生活している彼女たちが、どのような姿勢や視点から日常生活に介入してくる政治的問題を受け止めているのかについて明らかにすることを目指す。

## 2 研究方法の枠組み

本稿では、在韓の日本人女性たちにアクティブ・インタビュー（ホルスタイン&グブリアム 2004）を実施し、インタビューの中で語られられたスモール・ストーリーを対象に分析を行う（Bamberg & Georgakopoulou 2008）。分析に際しては Bamberg (1997, 2004) の提唱したポジションニング分析の手法に従い、物語の世界と相互行為の場における語り手の位置付けとアイデンティティについて考察する。また、分析の結果明らかに

なった彼女たちのアイデンティティを関わり合いの中で表出・構築されたもの (Bamberg & Georgakopoulou 2008: 3) として捉え、その考察を通じて彼女たちがどのような姿勢や視点から日常生活に介入してくる政治的問題を受け止め関わっているのかを明らかにする。

## 2.1 アクティヴ・インタビュー

本稿ではホルスタインとグブリアム (2004) によって提唱されたアクティヴ・インタビューの視座を取り入れる。アクティヴ・インタビューではインタビューの中で情報が作り出されるプロセスが、情報の内容と同様に重要であると考えられる。本稿ではアクティヴ・インタビューと同様の立場を取り、インタビューを参与者の相互行為の場として定義するとともに、分析に際してはその中に現れる情報の内容だけでなく、それがインタビューの中で参与者によって協働で構築されていくプロセスにも注目する。

## 2.2 スモール・ストーリー

スモール・ストーリーとは、進行中の会話において参与者の関わり合いの場として生じる短い語りのことを指す。具体的には、進行中の出来事、将来または仮想の出来事、既知の出来事の共有や、語ることのほめかし、語りの延期、語ることの拒否などの形態が存在する (Georgakopoulou 2006, 秦 2013)。Georgakopoulou は相互行為の場において構築される局所的なアイデンティティを、その場に参加した他の参与者と協働で構築される流動的で常に修正可能なものであると述べている (Georgakopoulou 2006)。本稿では、インタビューの中に現れた在韓日本人女性たちのナラティブをスモール・ストーリーの枠組みに従って抽出する。そして、関わり合いのなかで表出・構築される語り手の局所的なアイデンティティがどのようなものかについて分析・考察を行う。

## 2.3 ポジショニング分析

Bamberg (1997, 2004) はインタビューという相互行為の場において語り手が聞き手との関わり合いの中で表出・構築する局所的なアイデンティティには、ナラティブ領域における語り手の位置付けと相互行為の場における位置付けの両方が影響を与えていると言う。そのため Bamberg は局所的なアイデンティティを分析するために3つレベルを設けている。レベル1の分析では語られる世界に描かれる他の登場人物との関わり合いの中で示される自己が提示され、レベル2の分析では語りの世界において他の参与者との関わり合いの中で示される自己が提示される。そしてレベル3の分析においては、レベル1・2の自己の提示を通して創造される、その場の文脈から分離して持ち運び可能

な文化的・社会的自己である包括的なアイデンティティが明示される。本稿では、在韓日本人女性たちのナラティブをスモール・ストーリーの枠組みに従って抽出し、Bambergの提唱したポジショニング分析に基づきナラティブ領域とそれが語られる相互行為の場において語り手が様々な要因との関わり合いの中でどのように自らを位置付け、その上でどのようなアイデンティティを表出・構築しているのかについて分析・考察する。

### 3 データ

本稿で使用するインタビュー・データは協力者2名と調査者1名の3名で実施された多人数会話であり、筆者が2019年2月、8月、9月、2020年2月に韓国で実施したインタビュー調査のうちの1部である。インタビューの対象者は、韓国人男性と恋愛結婚をして韓国に移住した日本人女性28名であり、調査者を含めた全員が韓国で日韓ダブルの子供1-3名を育てる母親でもある。以下、表1はインタビュー参加者の基礎情報である。なお、参加者の名前は全て仮名である。

表1 インタビュー参加者の基礎情報

データ番号	参加者	仕事	在韓歴	永住権	実施場所
データ1	ヨシミ	翻訳業	5年	なし	ヨシミ宅
	レイ	専業主婦	8年	なし	
データ2	ヒサコ	大学院生	13年	あり	調査者宅 (韓国)
	ユリ	専業主婦	3年	なし	
データ1,2	調査者	大学院生	7年	なし	

調査の際には2台のビデオカメラと1台のボイスレコーダーによって録画・録音を実施した。調査者と初対面であったのはユリのみであり、その他の3名とは面識がある程度に関係性であった。ヨシミとレイは普段から頻繁にやり取りのある間柄であるのに対し、ヒサコとユリは同年代の子供を持つ母親同士の集まりで顔を合わせる程度の仲であった。

### 4 分析

本稿では、2019年8月、9月に収集したデータの中から、表1に示した2つのインタビュー・データを取り上げ分析・考察する。インタビュー調査内で竹島/独島に関する話題が出たのは9グループ(18名)であった。そのうちインタビュアーから話題を提

供していたケースは2グループ、インタビュー自らが語り始めたケースが7グループであった。

#### 4.1 データ1：意見を持つための知識

データ1の開始前、レイは韓国に語学留学で訪れた頃は無知ゆえに韓国生活で恥ずかしい思いを沢山したと述べた。データ1では調査者に恥ずかしかった出来事について質問されたレイが自身の体験を例にあげ説明する。データ1では2つのスモール・ストーリーが語られ、1つ目は1-13行目（以下S1）、2つ目は22-36行目（以下S2）である。

##### データ1：意見を持つための知識

- |     |     |   |
|-----|-----|---|
| 1.  | レイ  | ：で食堂で旦那の友達とご飯を食べたら::日本人だって分かって::独島はど              |
| 2.  |     | ：ちの国のものだと思う?って聞かれて                                |
| 3.  | 調査者 | ：[((真顔で何度も頷く))                                    |
| 4.  | ヨシミ | ：[@@[@@@]   |
| 5.  | レイ  | ： [独島知らないしその時 ((チラッとヨシミを見る))                      |
| 6.  |     | ：まあ日本のものだと - (.) だったらいいと思いますって言って                 |
| 7.  |     | ： <u>さあ</u> : ってなったんですよ雰囲気が                       |
| 8.  | ヨシミ | ： ((苦笑しつつレイを見て何度も頷く))                             |
| 9.  | レイ  | ：してそこの友達が::フォローしてくれたんですよ ((ヨシミを見る))               |
| 10. |     | ：でも : 今は韓国に住んでるから韓国のもので良くない?みたいな                  |
| 11. |     | ： (.) ♪ レイ的にはそ-それでも別によくない? [みたいな感じになって ♪          |
| 12. | ヨシミ | ： [((口だけ動いている))                                   |
| 13. | レイ  | ：その場は収まったんですけど <S1 >                              |
| 14. | ヨシミ | ： ((笑みを浮かべながら頷く))                                 |
| 15. | レイ  | ：試されてることも <u>も</u> (.) 気づかないんですよ                  |
| 16. | 調査者 | ：ああ [それはため-試されてたんだ?                               |
| 17. | レイ  | ： [韓国人に   |
| 18. |     | ： (..) 多分その食堂の人は日本人だって分かって::日本人はどうやって考えてい         |
| 19. |     | ：るのかっていう答えっていうかまあそこでまあ戦うその喧嘩しようとかそう               |
| 20. |     | ：いう討論しようとかじゃなくて::ちょっと試されている感::だったのが               |
| 21. |     | ：私が <u>うまい</u> ことを知らないが故に <u>うまい</u> 風に返せなかったっていう |
| 22. |     | ：いや知らない (.) いやそんなこと私に聞かないでくださいでも言えたら              |
| 23. |     | ： (.) よかったのに:: ((ヨシミをチラッと見る)) 日本のものって (.) すに      |

24.           : 韓国人の前で言っちゃ無神経なのもむし (..) そのん-知識がないところか  
 25.           : ら出てきたっていうのが後から考えたら感じたんですよ  
 26. 調査者: ((頷きつつ)) うん  
 27. レイ : だから :: (..) 意見 :: 自分の意見をどっちにもつかっていうよりも前に ::  
 28.           : 意見を持つための知識?  
 29. 調査者: ((頷きつつ)) う :: ん  
 30. レイ : がないと :: ここでは :: (..) 恥ずかしい思いををすると思って  
 31.           : ((ここではテーブルを指差し、恥ずかしい思いをするでは自分を指す))  
 32. ヨシミ: ((チラッとレイを見て小さく頷く))  
 33. 調査者: ((頷きつつ)) う :: ん  
 34. レイ : 韓国に住むなら  
 35. ヨシミ: ((微かに頷く))  
 36. レイ : それで大学院に行ったんですよ < S2 >

まず、それぞれのスモール・ストーリーの中におけるレイの位置付け（ポジショニング・レベル1）について述べる。S1には2人の韓国人が登場する。1人はレイに「独島はどっちの国のものだと思う？」(1,2)と質問し、この人物の行為をレイは自分を試していたと評価づけしている。もう1人はレイの夫の友人でこの人物の行為をレイは「フォローしてくれた」(9)と評価づけしている。また、レイは2人に対し場の雰囲気壊す発言をする私（レベル1）として自身を位置付けている。次にS2でのレイの位置付けについて述べる。S2ではS1の出来事を回想するレイの様子が描かれ登場人物は過去の自分とそれを回想するレイである。レイは冒頭で「いや知らない」(22)、「そんなこと私に聞かないでください」(22)という直接引用を挿入し、S1で描かれた状況において「言えたらよかった」(22,23)回答を提示する。その回答は独島の領有権に関する質問に対し直接的な回答を拒否する形式である。またレイはS1での自身の回答に対し「無神経」(24)と述べ、再度S1での自身の対応を否定的に評価づけし、そのような対応に至った要因として自らの知識のなさを指摘する。つまり、ここでは無知ゆえに韓国人に対し無神経な発言をする私（レベル1）というレイの位置付けが示されるとともに、知識があれば「言えたらよかった」(22,23)回答ができたレイが認識していることがわかる。以上の点からレイの言う「意見を持つための知識」(28)とは、日韓どちらの主張を支持するかを決めるための知識ではなく、相手に対し失礼のない適切な返答をするための知識を意味していると推測できる。つまりS2では自身の経験から韓国に住むために必要な知識について理解したレイがそれを身につけるため大学院に進学する過程

が描かれるとともに、知識をつけるために大学院に進学した私（レベル1）という位置付けが示されているといえる。

次に、相互行為の場におけるレイの位置付け（ポジショニング・レベル2）について述べる。S1は恥ずかしい体験の一例を伝える目的でレイが相互行為の場において話したものである。しかし調査者は質問をした韓国人を否定するのではなく、自身を試したとするレイの評価づけが理解できず「試されてたんだ？」（16）と聞き返す。自分の認識が理解されていないことに気づいたレイは19-20行目で「戦う」「喧嘩」「討論」という「戦い」を連想させる単語を3度反復した後に打ち消すことで、韓国人の意図が独島の領有権について争うことではない点を強調する。そして、そのような韓国人に対し「知らないが故にうまい風にかえせなかった」（21）私（レベル2）という自身の位置付けを提示する。その後語られたS2からは韓国で生きていくために必要な知識に気づいていくレイの姿が描き出されるとともに、それを身につけるため大学院に進学する様子が提示される。この語りの内容からは、レイが「韓国に住むなら」（34）日本人として試されるような事態は繰り返し起こる可能性があり、その際に質問者に対し失礼のない適切な切り返しができる知識を身につけておく必要があると認識し、そのための準備として大学院に入って知識をつけようと志す様子が窺える。そこからは韓国で生きていくために積極的に知識を身につける私（レベル2）というレイの位置付けが見受けられた。

最後に、レイが実践する文化的・社会的自己＝包括的なアイデンティティ（ポジショニング・レベル3）について述べる。データ1で示されたレイの位置付けからは、韓国で生活する限り日本人代表として韓国人に試されるような状況が繰り返し起こる可能性がありその際に適切な回答を返せないことは恥ずかしいことであると彼女が認識していること、また彼女がそのような状況を回避するため自ら積極的に行動し知識を身につけようと大学院に進学する私という自身の姿を他の参与者に対し提示しようとしていることがわかった。データ1で示されたこのようなレイの姿からは、韓国社会に適応するために能動的に行動し努力できる私（レベル3）という包括的なアイデンティティが読み取れた。

#### 4.2 データ2：私、今日結婚式

データ2開始前、調査者に韓国で日本人だから遭遇したと思われる出来事があるかと質問されたヒサコは、それは悲しい経験のことかと聞き返しそのような経験はないと述べた。データ2はその直後に語られたものである。データ2の中では、ヒサコによって複数のスモール・ストーリーが語られる。1つ目は51-64行目（以下S1）、2つ目は66-68行目（以下S2）、3つ目は71-74行目（以下S3）、4つ目は79-80行目（以下S4）

である。

## データ 2：私、今日結婚式

50. ヒサコ：まあ ((何度か頷き)) (..) してもまっい-嫌っていかびっくりしたのは

51.		：結婚式当日に：
52.	調査者：	はい
53.	ユリ	：((ヒサコをみる))
54.	ヒサコ：	あの :: ヘアメイクの： ((一瞬ユリを見るユリ頷く)) 助手のお姉さんが :: 日本人
55.		：に (..) あつたらなんかぜひ聞いてみたいことがあつたんですって言われて
56.		：((嬉しそうな表情で)) 何ですか? って聞いたら独島はどっちの国の
57.		：[ㄹ ものだと思いますか? ってㄹ
58.	ユリ	：[@@@@@
59.	ヒサコ：	結婚式当日に聞かれてちょっと (.) ちょっと面白かった
60.	調査者：	@@@@@
61.	ユリ	：@@@@@
62.	ヒサコ：	[ええっ? みたいな私今日結婚式みたいな @@@ [@@
63.	ユリ	：[@@@@@@@@@ [@@@@@@@
64.	調査者：	[@@@@@@@ < S1 >

65. : な - なんて切り返したんですか?

66.	ヒサコ：	(..) あつそれでもう @@ あの :: 独島ってㄹ 言つたら日本ㄹ あつだから
67.		：[ㄹ 竹島は日本のものだけど @@ 独島は [韓国なんじゃないですかとかㄹ
68.	ユリ	：[((ヒサコを見て何度も頷く)) [@@@@@ < S2 >

69. ヒサコ：[適当に言つた気がします @@@@

70. 調査者：[なるほど：うん ::

71.	ヒサコ：	なんか <u>すごい</u> ほんと目キラキラさせて ::
72.	ユリ	：((ヒサコを見て)) うん ::
73.	ヒサコ：	((両手でキラキラの表現)) 日本日本人の人にあつたら聞いてみたかつたん
74.		：ですつて言われたから： [(..) なんかつごいなあ :: と思つて [((頷く)) < S3 >

75. 調査者： [(頷いて)) うん [うん ::

76. ユリ : うん ::

77. ヒサコ：でっ (..) か - 私たちそんな韓国の人に会つて (..) そんなん聞きたいと思わな

78. : いじゃない? ((ユリに対して確認、ユリは首を左右に振りううんという))

- |     |   |   |
|-----|---|---|
| 79. | ： | もし聞くんだったら何か (.) な -何聞くやろう? 韓国のひ - 初めて韓国の人     |
| 80. | ： | にっなんか (..) 美味しい美味しい韓国料理のお店どこですか? とかなんか < S4 > |
81. ユリ : [うん ::
82. ヒサコ : [そういう [自分が興味のあることを聞くと思うんですけど
83. ユリ : [うん :: ((ヒサコを見ながら何度も頷く))
84. ヒサコ : そうそう日本人に会って (1) 聞いてみたい :: ことがそれなのが
85. : ちょっと面白かったです
86. ユリ : うん ::
87. 調査者 : うん ::
88. ヒサコ : @@@@
89. 調査者 : なるほどな ::

まず、それぞれのスモール・ストーリーの中におけるヒサコの位置付け（ポジショニング・レベル1）について述べる。S1-S3の登場人物は、ヘアメイクの助手をしていた韓国人女性とヒサコである。韓国人女性はヒサコに向かって「日本人にあったらなんかぜひ聞いてみたいことがあった」（54,55）と述べ「独島はどっちの国のものだと思いますか?」（56,57）と質問する。ヒサコはこの韓国人女性の発言を「ちょっと面白かった」（59）と評価づけしているが、その後示された「ええっ?」（62）、「私今日結婚式」（62）という台詞からは驚く様子が見受けられ、韓国人女性の質問に対し驚きつつも面白いと感じる私（レベル1）という位置付けが窺える。続くS2では韓国人女性の質問に対し「竹島は日本のものだけど独島は韓国なんじゃないですか」（67）と返すヒサコの姿が描かれ、質問に対し曖昧な回答を提示する私（レベル1）という位置付けが示される。続くS3では韓国人女性の様子を「目をキラキラさせて<sup>3</sup>」（71）と説明し興味を持って尋ねる姿に「すごいなあ」（74）という評価づけを行うとともに、顧客でもある初対面の日本人に結婚式の当日にそのような質問をする質問者に対し驚きを示す私（レベル1）という自身の位置付けを示す。最後のS4ではヒサコが初対面の韓国人に対し「美味しい韓国料理のお店どこですか?」（80）と質問する。この発言からは初対面の相手に当たり障りのない質問をする私（レベル1）というヒサコの位置付けが見受けられる。また、S1-S3と類似した状況で自分であればどうするかという彼女の見解が窺えるとともに、初対面の相手には当たり障りのない質問をするという彼女の規範意識のようなものが受けられた。

<sup>3</sup> 小学館のデジタル大辞泉によれば「目をきらきらさせる」は喜びや希望、また興味をもった様子が表情に出ていることを表す表現である。

次に、相互行為の場におけるヒサコの位置付け（ポジショニング・レベル2）について述べる。S1は自身の驚いた体験を共有するためにヒサコが語り始めたものである。同時にヒサコは韓国人の質問を再現する際に笑ったり（57）、「面白かった」（59）と評価づけるなど、語りを面白かった体験としても提示していた。それに対し調査者とユリがヒサコの評価づけるを笑いを伴って受け入れる様子を見せ（60,61）3人が質問を面白いと感じる私たちという位置付け（レベル2）を共有する様子が観察された。その後「なんて切り返したんですか？」（65）と調査者が尋ねると、ヒサコの顔から笑みが消え少しの間沈黙する様子が見られる。しかしS2を語る際には再度笑いながら自らの発言を再現し「適当に言った」（69）と評価づける。ヒサコが笑いながら提示した返答内容に対し彼女より年下で在韓歴の短いユリは何度も頷き笑いを見せるが（68）、調査者は笑い返す様子を見せなかった（70）。するとヒサコはS3で再度韓国人の言動に対する自身の驚きへと参加者の関心を誘導しようと試みており、ここからは相互行為の場で彼女が共有したい点が質問に対する驚きであることが窺える。そしてS3を語った後、ヒサコはユリに視線を向け「私たちそんな韓国の人にあってそんなん聞きたいと思わないじゃない？」（77,78）と確認するように尋ね、ユリがそれに対し同意を示す（78）。ここでは協力者の私たちと調査者という線引きがヒサコによって行われていることがわかるとともに、韓国人と政治的な話をしたいと思わない日本人の私たち（レベル2）という位置付けをヒサコがユリとの間で共有しようとする様子が見られた。その後ヒサコはS4の中で自分ならばどうするかという例を提示し、質問内容について「自分が興味のあること」（82）を聞いたと評価づける。その際、ユリはヒサコを見つめながら何度も頷く様子を見せ、ヒサコを支持する姿勢を表す。以上の点から、初対面の外国人に日本人はどのような質問をするかというヒサコの見解がユリの同意を伴いつつ私たちの見解として調査者に提示されていることがわかる。そして「日本人にあって聞いてみたいことがそれなのがちょっと面白かった」（84,85）というヒサコの発言からは、それが韓国人の場合は独島の領有権という政治的な話題であることを示すとともに、そのような韓国人と日本人の違いを文化的な相違と捉え面白いと評価づける私（レベル2）という自身の位置付けをヒサコが提示する様子が観察された。

最後に、ヒサコが実践する文化的・社会的自己＝包括的なアイデンティティ（ポジショニング・レベル3）について述べる。データ2では、韓国での悲しい体験を調査者が聞きたがっていると認識したヒサコが驚いた話として独島の語りを行う。ヒサコは相互行為の場において語ることを通じて、韓国人の質問に対し驚きつつも面白いと受け止める様子を提示するとともに、初対面の日本人に対する韓国人の言動を日本人とは異なると評価づける。また参加者に対しては、そのような異なりに拒否感を示すのではなく、

それを文化的な違いと受け止め面白いと感じる自身の姿を提示しようとする。これらのヒサコの言動からは、韓国で政治的な問題を急に突きつけられた際に驚きつつも文化的な違いとして捉え面白いと受け流せる柔軟な私（レベル3）という自身の包括的なアイデンティティを前景化させようとする様子が見受けられた。

## 5 考察

以下では本稿で提示した3つのリサーチ・クエスション（以下 RQ）への回答と、その結果得られた総合的な考察について述べる。まず RQ1 への回答として、データ1では、「無知ゆえに適切に切り返せなかった私」や、「無知さを補おうと行動する私」という位置付けが観察された。ここからは日本人として適切な返答ができなければ恥ずかしいという語り手の認識や、自分はそうならないよう努力しているという主張が窺えた。データ2では悲しい体験を求められていると認識した語り手が遭遇した出来事を驚きつつも面白いと感じる自身の姿を語りの中で前景化しようと試みており、その語り方からは悲しい体験があるという推測に対抗したいという語り手のオルタナティブな姿勢が窺えた。そして「韓国人と政治的な話をしたいと思わない日本人の私」という位置付けからは、独島問題に関する教育を幼い頃から受けている韓国人とそうではない日本人の自分の間に存在する格差を日韓の政治的な話題に関わる姿勢の文化的な違いとして表現し、その点に深く踏み込まずに対処しようとする様子が窺えた。

次に、RQ2 への回答を述べる。データ1では「韓国社会に適応するために能動的に行動し努力できる私」、データ2では「韓国で政治的な問題を急に突きつけられた際にも驚きつつも文化的な違いとして捉え面白いと柔軟に受け流せる私」というアイデンティティがそれぞれ語り手によって表出・構築されていた。ここからは、強制的に日本人代表として位置付けられ意見を要求される状況に曝されても自分なりの対処法を見つけ上手に泳いでいる私という感覚を彼女たちが共通して所持していることがわかった。

最後に、RQ3 への回答を述べる。まず両データの共通点として語り手が、韓国人が独島の領有権に関する質問をするのは諍いを起こすためではないと認識している点、独島の領有権に関して明確な解答を回避しようと試みている点が挙げられる。RQ1・2の結果と以上の点を合わせて考慮すると、彼女たちが韓国社会や韓国人を否定的に捉えるのではなく、韓国人の言動に反応するのは自分側の問題だと認識して状況に対処する姿勢・視点を所持し、そのようなスタンスから日常生活に介入してくる政治的問題に関わっていることがわかる。このような関わり方は、強制的に日本人代表として位置付けられ意見を求められる経験を積む中で彼女たちが生み出した対処法であり、個人的な力では変革しようのない韓国での現実を甘受しつつも、自分達が生活・就労・育児を行う韓国

での安定した日常生活を自ら脅かさずに状況に対処するための戦略の一つだと言えるだろう。

以上のことから総合的に言えることは、非常に難題と言われる日韓問題の渦中にいる彼女たちの生き方と社会問題との関連である。彼女たちの対処法や関わり方は、一見すると政治的な意見を述べたり抵抗運動を行ったり他者にそれを促すといった積極的な姿勢ではないように見えるかもしれない。しかし、彼女たちが未だ過去の戦争の記憶や領有権をめぐる対立を顕にしている両国の狭間で生きているという現状や、我が子が日本人の母親を持つ・日本にルーツがあるというだけでいじめの対象になるなどといった実態を考量すれば、彼女たちの示す被攻撃性が他のマイノリティ集団の中でも顕著で特殊なものであるという点が理解できるのではないだろうか。彼女たちの生きる現実を垣間見ると、学校・家庭・メディアを通じて反復・蓄積されてきた韓国人の中に存在する日本人像や日本に対する硬軟な攻撃・非難に対して彼女たち個人が直接的な政治批判や行動を起こすことは、時として彼女たちの韓国生活を脅かす可能性があることがわかる。このことは逆に言えば、彼女たちが身を置くそのような社会状況の改善を彼女たち自身の行動に担わせることは適切ではないということでもある。以上の点を考慮すれば、彼女たちがこのような対処法で生き抜かなければならない日常は、広く政治的な日韓問題を解決することによってしか改善されないとと言えるのではないだろうか。

## 6 まとめ

本稿で明らかになった在韓日本人女性たちの対処法は、時として彼女たち個人の意思で選択されたものとして認識され批判の対象になることもある。しかし、本稿で示された位置づけやアイデンティティからは彼女たちが韓国において強制的に日本人代表として扱われ意見を求められるような状況に遭遇していること、日本では韓国で不憫な目に遭っている日本人として扱われている可能性があることなどが示唆されており、彼女たちの対処法がそのような社会状況との関わり合いの中で構築されているという側面を看過することは彼女たちに対する誤解へとつながる可能性がある。本稿で示された結果は、야마모토 (2013) や나리타 (2020) の先行研究からは見えていなかった側面を明らかにするとともに、彼女たちの対処法が大きな政治的影響力を持たない一輩の彼女たちによって構築された自分が身を置く社会状況の中で現状を甘受し生き抜くための戦略の一つでもあることを示した。これらの点を明確にすることは、彼女たちへの理解の深化や心理・社会的支援の開発につながる新たな示唆を得るための一つの機会になったと考えられる。

## 参考文献

- Bamberg, Michael (1997) Positioning Between Structure and Performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1/4), 335-342.
- Bamberg, Michael (2004) Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.
- Bamberg, Michael, & Georgakopoulou, Alexandra (2008) Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377-396.
- Georgakopoulou, Alexandra (2006) Thinking big with small stories in narrative and identity analysis. Bamberg, Michael (ed. with introd.), *Narrative-State of the Art*, pp.145-154. Amsterdam, Netherlands; John Benjamins Publishing Company.
- 秦かおり (2013) 「なんとなく合意」の舞台裏 在英日本人女性のインタビュー・ナラティブに見る規範意識の表出と交渉のストラテジー」佐藤彰・秦かおり (編) 『ナラティブ研究の最前線 - 人は語ることで何をなすのか -』、ひつじ書房、pp.247-271.
- 花井理香 (2016) 『国際結婚家庭の言語選択要因 - 韓日・日韓国際結婚家庭の言語継承を中心として-』、ナカニシヤ出版.
- ホルスタイン・ジェイムズ／グブリアム・ジェイバー (2004) 『アクティヴ・インタビュー - 相互行為としての社会調査-』、山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行 (訳)、せりか書房.
- 中尾美知子 (2010) 「韓国の「結婚移民者」にみる流動と定着」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』 vol.12 (2)、岩手県立大学社会福祉学部、pp.41-50.
- 中西尋子 (2006) 「<特集><スピリチュアリティと幸福> 神と霊界への信仰: 統一教会における合同結婚式参加者たちの結婚生活」『先端社会研究』 vol.4、先端社会研究所、pp.136-159.
- 나리타 마미 (2020) 한국에 거주하는 일본인 결혼이주여성의 마이크로그래션 경험에 관한 연구 (韓国に居住する日本人結婚移住女性のマイクロアグレッション経験に関する研究). 석사학위논문, 서울교육대학교 교육전문대학원, 서울, 한국.
- 박에스터 (2017) 연애결혼한 일본인 이주여성의 자녀 양육 갈등과 대처에 관한 질적 연구 (恋愛結婚をした日本人移住女性の子供の養育における葛藤と対処に対する質的研究). *일본언어문화*, 38, 281-302.
- 山本かほり (1994) 「ある「在韓日本人妻」の生活史 - 日本と韓国の狭間で-」『女性学評論』 vol.8、神戸女学院大学、pp.55-85.
- 야마모토 노부히토 (2013) 재한일본인의 문화적응 유형 연구 (在韓日本人의 문화適応類

型研究). 석사학위논문, 전남대학교 대학원 디아스포라학 협동과정, 광주, 한국.

### トランスクリプト記号

(.)/(..)	0.2 / 0.5 秒以下の短いポーズ	(数字) (数字) 秒の短いポーズ
_____	強調的に発音される箇所	? 疑問形の上昇イントネーション
:	音の引き伸ばし (個数は長さ)	@ 笑い (個数は長さ)
(( ))	状況説明	[ 発話の重複の開始箇所
¥-¥	笑いながらの発話 (¥¥の間)	- 言い間違いなどによる言葉の詰まり